

読書ノート

Psychological Sense of Community: Prospects for a Community Psychology by Seymour Bernard Sarason

川 西 論*

本書は、セイモア・サラソンという心理学者が1974年に書いた心理学の著書で、邦訳はされていない。タイトルを邦訳すると「心理学的コミュニティ感覚：コミュニティ心理学への展望」となるだろうか。

サラソンは教育心理学、コミュニティ心理学の分野で多くの業績を残したアメリカの心理学者で、イェール大学で45年にわたって教鞭をとった。本書はサラソンがその設立を主導したコミュニティ心理学の展望書である。

本書と経済学の関係について

経済学においても近年関心が高まっているソーシャル・キャピタルという概念がある。社会の中の信頼関係や助け合いのネットワークを指す概念であるが、関心が高まっているのは日本をはじめとした先進国の多くでそれが弱体化しているとされているからである。

このソーシャル・キャピタル概念を世に知らしめたロバートパットナムの著書「孤独なボウリング」(Putnam 2000)は米国においてコミュニティが崩壊し、ソーシャル・キャピタルが弱体化していることとそれが社会のもたらす悪影響を州レベルの比較分析によって明らかにし、世界に衝撃を与えた。

パットナム自身がコミュニティの崩壊を指摘していることから、ソーシャル・キャピタルという概念は社会におけるコミュニティと深い関係にある。ソーシャル・キャピタルを理解するためにはコミュニティを理解しなければならないと言ってもよいであろう。

コミュニティは社会学においても研究されているが、本書は心理学の分野からのコミュニティの研究書となっている。心理学と経済学の学際的な研究である行動経済学の研究者にとっても、心理学者がコミュニティをどのように捉えていたのかを知ることができる貴重な研究書と言えるだろう。

実際、ソーシャル・キャピタルに興味を持つ行動経済学の研究者には是非知ってほしい内容が多く書かれている。

Psychological sense of community の邦訳について

タイトルの Psychological sense of community を冒頭では心理学的コミュニティ感覚と訳したが、以下ではコミュニティ感覚と訳すことにしたい。実際、心理学の文献においても Psychological sense of community は単に sense of community と表現されることが多く、コミュニティ心理学会でもコミュニティ感覚という表現が多く使われているからである。

* 上智大学経済学部経済学科

連絡先 E-mail: s-kawani@sophia.ac.jp

コミュニティは共同体と訳されることもあり、「共同体感覚」という邦訳を想起された方も多いかもしれないが、日本において「共同体感覚」は似ているものの異なる心理学概念として存在している。心理学の巨匠アルフレッド アドラー (Alfred Adler 1870-1937) が提唱した「gemeinschaftsgefühl」という概念が日本では「共同体感覚」と訳され、広く知られている。山田 (2023) によれば、「共同体感覚は、当然ながら他者とのつながりがあることが前提であり、他者は対立する敵ではなく、互いに結びついている仲間である。そしてその仲間へ貢献できることを共同体感覚と呼ぶ」と紹介している。アドラー自身はこの概念を「social interest」と英訳しているが、この英訳では社会における人間関係に対する関心という意味になり、アドラー自身が言及した概念とは一致していないとの指摘もある。

実は、本書の中ではアドラーの名前も言及されているが、アドラーの「共同体感覚」については一切触れられていない。また後述のように、本書は「心理学的コミュニティ感覚」というタイトルでありながら、それが何であるかはあまり詳しく言及されていない。比較的わかりやすい説明は冒頭の Overview の 1 ページにある以下の記述である。

“... the sense that one was part of a readily available, mutually supportive network of relationships upon which one could depend and as a result of which one did not experience sustained feelings of loneliness that impel one to actions or to adopting a style of living masking anxiety and setting the stage for later and more destructive anguish.”

つまり、コミュニティ感覚とは「自らが、すぐに利用可能で、相互に支援しあうような人間関係のネットワークの一部であるという感覚」であり、そのネットワークに依存することができ、その結果として自分は孤独であると持続して感じることはないとしている。このことが重要なのは、持続する孤独感には人に様々な (問題のある) 行動をとらせたり、欲求を隠す生活スタイルをさせたり、後により破壊的な苦痛の土台を作ったりするからだとしている。

アドラーの「共同体感覚」にも厳密な定義がないとされ、このため両者の関係は明確ではないが、それぞれの説明から判断すると 2 つの概念には共通する部分も多い。

これら 2 つの概念の関係についての深掘りは本稿では避けるが、両者が異なる概念として存在しているものとして、サラソンの概念は「共同体感覚」ではなく「コミュニティ感覚」と訳すことにしたい。

本書の概要

先述の通り、本書はコミュニティ感覚をタイトルとする本であるが、コミュニティ感覚そのものについての言及は多くなく、コミュニティ感覚とは何かという関心で本書を読むと期待を裏切られたように感じるかもしれない。本書の大部分はサブタイトルのコミュニティ心理学の展望について書かれている。コミュニティ心理学が必要とされている米国の社会的背景、すなわち、アメリカ社会において本書が書かれた 1974 年の時点ですでにコミュニティの崩壊や社会の分断が始まっていて、それが米国社会に様々な問題を引き起こしていること。とりわけ、心の問題、悩み、精神疾患を持つ人が増加していることが問題であるが、既存の心理学ではその問題に対してほとんど解決ができていないことなどを説明し、これらの問題を解決するためにコミュニティ心理学のアプローチが必要であることを説いている。タイトルのコミュニティ感覚はコミュニティ心理学が中心に据えるべき価値観 (何が大事なのか) であり、またそれに基づくコミュニティへの取り組みを評価する際の基準 (何が望ましいのか) を与えるものであるとしている。

米国の社会的背景

本書の内容で興味深いのは、心理学者の視点で、第二次世界大戦から1970年代にかけての米国社会の状況とそれが社会と心理学に与えた影響を丁寧に紹介している点である。

米国のコミュニティが崩壊していることはPutnam (2000)にも紹介されているが、その問題をサラソンは1970年代にすでに認識していたことは興味深い。

特に興味深かった内容をいくつか紹介したい。

まず、第二次世界大戦について、サラソンは心理学研究にポジティブな影響を与えたとしている点。当時の心理学は行動主義や実験室実験など社会とは断絶された大学の中で行われ、社会との関係や応用は軽視されていたが、第二次世界大戦のさなかにおいては、大学および心理学も戦争に協力することを求められ、社会との関係や応用を余儀なくされたとされている。

日本国民とは異なる立場で第二次世界大戦がどのような影響を与えたのかについてはあまり知る機会がなく、米国民の日常生活にも非常に大きな影響を与えていたこと、大学の研究にも大きな影響を与えていたことを改めて認識することができた。

また、サラソン自身が、心理学という学問が社会から断絶された学問になっていたことを問題視していたことと、戦争によってそのような状況が一時的にであれ変わったことをポジティブに捉えていることは興味深かった。心理学という学問の特殊性は行動経済学を研究する中で感じる事が多くあり、その中に応用への意識の違いも感じられることがあったが、そのような意識を持つ心理学者がいること、そしてそのような学者が新しい心理学を始めたことを興味深く感じた。

大戦後、米国はコミュニティの崩壊へと進んでいくが、それは日本と同様の経済成長と行政サービスの充実、そして都市化によるものもあるが、米国に固有の現象として人種差別撤廃運動による社会の分断、泥沼化したベトナム戦争とそれに反発する若者たち、退役軍人のメンタル問題などがあることがよくわかった。これらの特殊な事情によって、米国のコミュニティの崩壊は日本のそれよりもかなり急激に進んでしまったことが想像される。とりわけ、社会の中に異なる人種の人達が共存し、かつ人種差別撤廃に賛成と反対の異なる考え方の人達が共存する中で、コミュニティの分断や社会不安、治安悪化が進んだことは米国社会の特徴で、その影響は出版から50年以上たった現在においても米国社会に残っていることに問題の難しさを痛感させられる。

ベトナム戦争も米国社会に暗い影を落としていることが指摘されているが、とりわけこの戦争の退役軍人の多くがメンタルな問題を抱えてしまったことが米国心理学会のその後に大きな影響を与えたこと、そしてサラソンのコミュニティ心理学の創設に大きく関わっていることが興味深い。

ベトナム戦争と臨床心理学

ベトナム戦争はメンタルの不調を訴える多くの退役軍人を生み出し、心理学者はこの社会課題の解決に取り組むことを求められるようになった。大きな国家予算が付き、多くの心理学者がこの課題に取り組むことを迫られた。

しかし、巨額の予算と人材が課題解決に向けられたものの、サラソンは課題の本質的な解決にはいたっておらず、対症療法で問題の悪影響を軽減しようとしているにすぎないと指摘している。

その原因として、当時の心理学者の多くは、退役軍人の心のケアという実践的な研究には興味を示さず、臨床で活動する研究をレベルの低い研究とみなす傾向があったこと。結果として十分な教育とトレーニングを受けることなく排出された人材が、臨床でメンタルな問題を抱えた人達のケアに当たることになったこと。

そして、そもそもの治療方針自体にも根本的な誤りがあったことも指摘されている。代表的なものが以下の Thomas Szasz (1920–2012) の批判である。

Szasz's criticisms

1 医学が病気を定義する通常の基準（例えば、ガン、結核、インフルエンザ）は、精神医学 (psychiatry) が精神病と呼ぶ現象には当てはまらない。精神病は神話であり、思考や生活の乱れの社会的性格を曖昧にする機能を持つ。（つまり、精神病は病気ではない。）

2 精神疾患は他の医学的疾患と同じであるという神話を広めることで、精神科医は医学的役割の結果である尊敬や他の報酬を得る。（病気ではない症状を病気とすることで精神科医は儲けている。）

3 精神医学は、社会が定義する異常行動と、そのように定義された人々を隔離し孤立させようとする社会の強い傾向と結託してきた。（問題を抱えた人達を社会から隔離された精神病院に入院させることで、精神医学は問題を抱えた人を隔離してきた。）

精神医学は、少なくとも3つの方法で「狂気を製造」している。

- 「精神病」の概念化
- 法律との関係
- 人々を施設での生活の運命に追いやること

4 精神医学の理論と実践は、精神医学に奉仕する人々が自分自身の人生に責任を持つことを困難にするような価値観に貫かれている。個人の権利の尊重は、特に精神医学と政府一般によってますます無視されるようになってきている主要な価値観である。

この批判を見ると、程度の差こそあれ、日本国内においては現在においても、メンタルな問題を抱え、問題となる行動をとる人達に対して、同じような対応をしているのではないかと想像させられる。私たちは常識としてそれを受け容れているが、ひょっとするとそれは大きな間違いであり、治療と考えられている行為が実際には問題の解決に向かっていないのかもしれないことに気づかされる。

メンタルな問題が当時の精神医学の治療によって改善されないもう一つの理由として、サラソンは精神医学が、問題の原因を患者本人の中に求めていることだと指摘する。サラソンは、乱れた家庭生活、家庭内や地域社会からの孤立、仕事への不満や失敗、地域社会の不十分な支援資源、個人的な不幸の連鎖、不安定な仕事、依存の増大など様々な社会的要因によってメンタルの問題が起こされており、それにもかかわらず、本人の中に原因を求めようとしても原因を見つけることはできないし、環境を変えることなしに症状を改善することもできないと指摘している。

コミュニティ心理学とコミュニティ感覚

以上のような社会背景の中で、社会の変化に伴って増大しているメンタルな問題を抱えている人たちの問題を扱うことを目的として誕生したのが、コミュニティ心理学だとサラソンは紹介している。門外漢からは社会心理学の一分野と想像してしまいがちであるが、サラソンによれば、社会心理学はメンタルな問題を抱えた人達のケアの問題などとは距離を置いていたメインストリームの心理学の側において、社会の問題を現場に飛び出して研究をしようという研究者は少なく、そこからコミュニティ心理学が生まれたわけではないことを強調している。

サラソンは、当時多くの精神疾患を抱えた人達の疾患の原因は個人にあるのではなく、社会、集団、コミュニティに問題があると考えた。ベトナム戦争等での忘れがたい辛い経験もあるだろうが、米国社会の中の

コミュニティが崩壊し、人々がコミュニティ感覚を感じられなくなり、そのために持続的に孤独感を感じるようになったこと、それが様々なメンタルな不調を生じていると主張する。問題は個人にあるのではないのだから、人間だけを見てはダメで、多様な要素を含む社会をその中の文化を見なければならぬ。

そのような考え方に基づいて、問題への様々な取り組みが行われているが、その効果を評価する際の包括的な基準 (overarching criterion) としてコミュニティ感覚に注目する必要がある、その意味でコミュニティ感覚は重要な概念であるというのが、本書を通じてサラソンが繰り返し述べている主張である。

取り組みによって、問題を抱えていた人たちがコミュニティ感覚を取り戻しているかどうかをもって、良い取り組みかどうかを判断するべきであるというわけである。

コミュニティ感覚とは何なのか？

とても重要であることが強調されているコミュニティ感覚であるが、本書の中ではその内容の記述が非常に少なく、門外漢からすると明確に定義されているようには思えない。

冒頭にも述べられている通り、コミュニティ感覚とは「自らが、すぐに利用可能で、相互に支援しあうような人間関係のネットワークの一部であるという感覚」であるとされているが、これだけで、コミュニティ感覚が取り戻されているかを評価するのは困難であるように思われる。

その他の手がかりとして、第6章においていくつかの手がかりが与えられている。

特に多くの文献で紹介されているのがその構成要素 (ingredients) である。

“The perception of similarity to others, an acknowledged interdependence with others, a willingness to maintain this interdependence by giving to or doing for others what one expects from them, the feeling that one is part of a larger dependable and stable structure—these are some of the ingredients of the psychological sense of community.” P.157

サラソンがここで挙げている構成要素は

- ・他者との類似性の認識 : the perception of similarity to others
- ・他者との相互依存関係の認識 : an acknowledged interdependence with others
- ・他者から期待されることを他者に与えたり他者にやっけてあげたりすることによってこの相互依存関係を維持したいという気持ち : a willingness to maintain this interdependence by giving to or doing for others what one expects from them
- ・自分がより大きな信頼できる (依存できる) 安定した構造の一部であるという感覚 : the feeling that one is part of a larger dependable and stable structure

の4つであるが、これらは構成要素の一部であるとも述べており、それ以外にも存在することをほのめかしている。

また、コミュニティ感覚の持つ性質として

- ・コミュニティ感覚があるかどうかは本人にはわかる。
- ・コミュニティ感覚は変化し、戦争や地震などでコミュニティが危機に瀕するとコミュニティ感覚は高まる。
- ・自己を定義 (自分は〇〇コミュニティの一員だと認識すること) し、外部の出来事を判断する (何かが起きたときにコミュニティ感覚にどのような影響があったかで、その影響を評価する) ための基盤の一つとなる。

ことの3つを挙げている。

本書に書かれたコミュニティ感覚についての主な説明は以上で、コミュニティ感覚の重要性がわかって、本書を読んだだけでは、それを実際に評価するのは難しいと感じられる。実際、本書が書かれた後、多くの研究者が独自にコミュニティ感覚を測定する方法を検討することになる。そうした試みを集約したものとしてみれば、McMillan and Chavis (1986) である。

自立支援の取り組み

本書の後半では、サラソン自身が関わった自立支援の取り組みを例に挙げている。

米国では、精神障害者や少年犯罪者が社会生活に戻れるようにするための「人道的な」施策として当たり前のように隔離政策が行われている。一般の人の目の届かない施設（精神病院や少年院など）で教育、療養、更生を行おうというのである。サラソンによれば、これらは完全に失敗してしまっているという。具体的には

- ・そもそも対象者の自立という目的が達成できていない。
- ・隔離された人達、そしてその関係者（家族や知人など）のコミュニティ感覚を壊してしまう。
- ・隔離された人達は社会に必要とされていないと感じる。疎外感や孤独感を感じさせる。隔離される人達の多くが隔離されることを望んでいない。社会経験の幅を狭めるために、社会生活を営む力が育まれない。
- ・その人たちをケアする人達の仕事も評価されない。
- ・隔離される人たちのための人道的な施策というのは建前で、本当のところは一般の人達の生活を守るためというのが本当の目的になっている。

という課題があるという。

悲しいことに、ここで挙げられた指摘は、現在の日本における政策にもそのまま当てはまるように思われる。知的障害者施設である相模原やまゆり園事件は記憶に新しく、障害者を社会的に隔離していることの問題性はこの事件を題材にした映画「月」でも痛烈に指摘されている。社会的隔離を正当化する価値観は日本にも深く根付いていると思われる。精神障害者や犯罪者の施設も当たり前のように隔離されている。サラソンは事例として扱っていないが、高齢者施設も隔離的な特徴があるところが少なくないように思える。

続く章では、コネチカット少年院の改革の事例などの成功例を紹介し、問題を誰かに擦り付けたり、責任を転嫁したりするのではなく、自分たちの問題、自分たちのコミュニティの問題として受け止めて、立場の違いを乗り越えてフラットな立場で話し合い、コミュニティの中で協力して問題を解決していくことが、支援を受ける人、支援をする人達すべてにコミュニティ感覚を生むこと。問題解決に貢献することで、生きがい、やりがいを感じられるようになること。そして、このような方法を採用することで、課題解決のためにかかる公的な予算を大幅に削減することができることなどのメリットがあることが指摘されている。

コミュニティで地域課題を解決することの難しさ

確かに、問題を抱えた人達の自立支援などの課題をコミュニティで解決することが本質的な課題の解決につながることは理屈の上では理解できる。しかし、それはとても難しいともサラソンは指摘する。

私たちは隔離政策を正当化する価値観からなかなか抜け出せない。その価値観の不適切さを認識し、心理的コミュニティ感覚に関わる新しい価値観を持つことができなければ隔離政策以外の代替案を考えることは難しい。

新しい価値観を持ったとしても、どうすればうまくいくのかの方法論についての考えが共有されていなければ、何をして良いのかがよくわからない。

コミュニティが崩壊した社会において、「自分たちの課題を自分たちで解決する」ことを実践すること

を通じて、人々がコミュニティ感覚を持てるようなコミュニティを再生する。どうすればそれができるのか。それを明らかにすることは社会科学研究者の役割であるが、そのためには研究者は研究室を飛び出して、社会の現場でソーシャルアクションに取り組むべきだとサラソンは主張する。

しかし、かつて主要な心理学の研究者たちが臨床研究を避けたように、ソーシャルアクションを否定する研究者は多く、そのことも地域課題の解決を難しくしていると指摘する。

この課題は、現在の日本の学術研究者を取り巻く環境にもあてはまるように思われる。

読後の感想

タイトルから想像した内容とは大きく異なり、そもそもコミュニティ感覚とは何なのかを知りたかった私としては、期待したことが書かれていないことに少し残念な気持ちにもなったが、じっくりと全ての章に目を通して読んでいく中で、既存の心理学や社会政策のあり方に対する厳しい批判を展開しながらも、その指摘にはとても説得力があり、本著が多くの人達に支持されてきた理由を理解することができた。その指摘は現在の日本における学術研究や社会政策のあり方にも通じる耳の痛い批判であるように思う。

既存の学問のあり方や社会政策のあり方について、疑問を投げかけることは勇気のいることであるが、どうあることが理想的なのかを問い続け、正しいと思うことを世に発信した著者に敬意を払い、自分も微力ながらそれに倣いたいという気持ちにさせられた。

文献情報

著者 : Seymour Bernard Sarason

書名 : Psychological Sense of Community: Prospects for a Community Psychology

出版社 : Jossey-Bass Publishers

出版年 : 1974

参考文献

山田篤司 (2023) 『アドラー心理学「共同体感覚」とは何か』高知工科大学紀要, 19巻, 1号, p. 43-53

McMillan, D.W. and Chavis, D.M (1986) "Sense of Community: A Definition and Theory." *Journal of Community Psychology*, 14(1), 24-40.

Putnam, Robert David (2000) *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster (ロバート・パットナム著, 柴内康文訳 (2006) 『孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房).